寄稿

# 徳永勧学寮頭の御発言に疑問を呈す

浄土真宗本願寺派浄弘寺住職
宗会議員
下川　弘暎

昨年の本願寺派機関誌『宗報』5月号に、宗門教学会議で、僧侶育成体系プロジェクトの答申に出てくる「人のために生き、人と共に生きる。――一緒性」について議論されたことが報告されています。

それによると、宗門は今まで念仏者の基本姿勢を示す言葉として「御同朋・御同行」を使ってきたが、その精神を継承して「一緒性」と表現し、人間関係の希薄化が進む社会に、新たな絆や相互のつながりを回復させる意味として、また、かつての言葉が輝きをとりもどし、再活性化が起こることを期待して提言したとされています。

この提言に対し、徳永一道勧学寮頭は「一緒性」の提言は「大乗の精神そのもの」と賛同され、そして「親鸞聖人は浄土真宗を『大乗のなかの至極なり』と示されていますね。にもかかわらず、過去の宗門では『安心はおのれ一人のしのぎの問題』ということに集約しすぎたきらいがあります。つまり、ご法義を個人の専有物のように捉える傾向が強いのです。『個の救い』に終始する態度は、自分以外の人びとと人生を『共に』歩んでいくことを大切にする大乗の精神に全く反しています」と述べられています。

（1）

まず寮頭は「一緒性」と表現することを「大乗の精神そのもの」と賛同されますが、問題は「一緒性」が浄土真宗のキーワードと言うべき「御同朋・御同行」の心を間違いなく表現しうるかであります。「御同朋・御同行」ということは同一信心、同一念仏の仲間を意味します。蓮如上人は、仲間のあり様を「信をえつれば、先に生まるるものは兄、後に生まるるものは弟よ。法敬とは兄弟よと仰せられ候。また『仏恩を一同にうれば、信心一致の上は、四海みな兄弟』」（『蓮如上人御一代聞書』246）と仰せになっていますように、信心決定が前提であります。

「一緒性」の表現は「御同朋・御同行」の心を伝えることができるのでしょうか。寮頭は賛同される根拠をお示しいただきたく思います。

（2）

次に過去の宗門は「安心はおのれ一人のしのぎの問題に集約しすぎたきらいがある」と批判されます。「安心はおのれ一人のしのぎの問題」は、換言すれば、安心（信心）決定の問題です。安心（信心）決定することは、相対を本性とする人間凡夫が、不可思議の法である弥陀の本願を疑いなくうけいれることは、極めて難しいこと（難中之難）でありますから、その難しいことを領解することを蓮如上人は「往生は一人のしのぎなり。一人一人仏法を信じて後生たすかることなり」（『同聞書』171）と仰せられていると考えます。

それを、寮頭は「過去の宗門は安心はおのれ一人のしのぎの問題に集約しすぎる」と批判されるなら、宗門が進める教化の絶対的課題である「信心決定」を相対化し宗門の根幹をあやめることにならないか危惧いたします。親鸞聖人は「信心定まる時、往生また定まる」（『親鸞聖人御消息』第1通）であり、「宗制」では、往生の正因が信心であることを述べ「信心正因・称名報恩」の浄土真宗の本義が述べられています。

寮頭の「過去の宗門は、安心はおのれ一人のしのぎの問題に集約しすぎたきらいがある」の宗門批判は、親鸞聖人や蓮如上人の仰せと異なるように考えますが、寮頭の真意をお示しいただきたく思います。

（3）

また寮頭は「『安心はおのれ一人のしのぎの問題』ということに集約しすぎた。それは、『個の救い』に終始する態度になり、それは大乗の精神に反する」と述べられます。

親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり……」（『歎異抄』御序）と仰せであり、蓮如上人は「……一人一人仏法を信じて後生たすかることなり」（『同聞書』171）と仰せであります。

信心決定による救いは一人一人の身に成就することであり、個の救いであると思います。

大乗仏教の「利他性」、即ち、自分以外の人々と人生を「共」に歩んでいくことを大切にする大乗の精神は、「個の救い」、即ち「信心決定の身」に自ずから表れる他に対する「優しさ」や「思いやり」をいうのではないでしょうか。

蓮如上人は「自信教人信と候ふときは、まず我が信心決定して人に教えて仏恩になるなり。自身の安心決定して教ふるはすなはち大悲伝普化の道理なるよし仰せられ候」（『同聞書』93）との仰せであります。

「個の救い」に終始する態度は、大乗仏教の精神に全く反すると批判なされますが、寮頭が述べられる救いの意味は、浄土真宗の信心決定による救いの意味とは異なるように思われます。寮頭の思いを、詳しくお尋ねいたさねばならないと思います。

（4）

寮頭は「過去の宗門は安心はおのれ一人のしのぎの問題に集約しすぎたきらいがある」と述べられますが、私は、特に江戸時代後期の、宗門を揺るがした三業惑乱騒動に幕府が介入し、その処断があまりに過酷であったため、一念覚知の異安心と断じられることを恐れ、信心決定ということに深く触れなくなったことが問題であると思います。すなわち「安心はおのれ一人のしのぎの問題」に集約しなくなったことであると思います。

報恩講は、毎年の報恩講も、50年ごとの大遠忌法要も、そのテーマは「信心決定」です。『御文章』大坂建立章（『御文章』4帖15通）の最後は「この一七箇日報恩講のうちにおいて、信心決定ありて、われ一同に……」とあります。

私たちは、先の大遠忌法要を勤めるについて、莫大な費用と時間と労力を費やしながら、どれほどに力を注いで、御信心をお伝えしようとしたでしょうか。否その前に、自らの「御信心、大丈夫か！」を問うたでしょうか。親鸞聖人や蓮如上人の勧められた真実信心を正しく伝えることができたでしょうか。深く反省しなければならないと思います。

いま、御法義が伝わらないことの最大の原因は社会の変化にもありましょうが、法を説く僧侶の側の問題にあると考えるべきと思います。蓮如上人の「信もなくて、人に信をとられよと申すは、われは物をもたずして人に物をとらすべきという心なり、人承引あるべからず……」（『同聞書』93）の仰せは、われら僧侶に対する厳しいお諭しといたさねばなりません。

宗門の機関誌『宗報』の記事となっている徳永勧学寮頭の御発言は、宗門教学上、重要な意味が含まれていると考えます。寮頭の真意をお述べいただかねばならないと思い、ここに投稿いたす次第であります。

# 戦没者慰霊、ラバウルを訪問　日持上人顕彰会

Scanned with CamScanner